

My Best One!

審査員が選ぶ「私の一冊」

日本ブックデザイン賞2015の審査員が審査会で最も気になった1冊を選び、その理由を語ります。



秋山 孝

Takashi Akiyama

My Best One!

日本ブックデザイン賞2015
一般部門／ブックジャケット(四六判)

『武士の娘』

上清涼太／日下潤一 (写真)

メインビジュアルは、越後長岡の独特な雪が降る前の鈍色（にびいろ）の風景を選び、おそらく信濃川の中州周辺を撮ったものに違いない。鉞子の本の中から読み取ることができるような越後長岡の自然感を表現している。その自然感とは、例えば、秋から冬にかけて空はどんよりした沈んだ曇り空になり、雷の時期がやってくる。その後、葉が落ちて雪が降り積もり、すべて覆いつくされて白一色になる。そして、正月を経て雪が溶けた後には雪に押しつぶされた植物群の間から小さな息吹が顔を出し春がやってくる。そんな、鉞子の本に書かれている長岡の自然感を、見事にデザインに落とし込んでいる。装飾的・説明的な部分をできるだけ削ぎ落とし、表現している。遥か向こう岸に見える冷たい水平を画面の下に配し、どんよりとした空を大きくとらえている。帯が巻かれた場合は、隠れてしまう部分にタイトルがレイアウトされている。挑戦的な提案であった。ほくたちに必要なのは、著者を理解し、絶えずデザイナーや表現者の信じるベストを試みることである。



武士の娘
杉本 綾子
APM

武士の娘
杉本 綾子
A Daughter of
Samurai
Etsu
Inagaki Sugimoto
APM

A Daughter of Samurai
Etsu Inagaki Sugimoto
APM



大迫修三

Nobumitsu Oseko

My Best One!

日本ブックデザイン賞2015
学生部門／ブックジャケット(文庫判)

『吾輩は猫である』

森本一平 (多摩美術大学)

私自身は、情報の収集において映像やネットのシェアが圧倒的に多くなっているのので、審査員としてふさわしいかどうかの疑問もありながらの参加であった。ブックデザインもこの数年大きな変化が生じており、表紙だけみたらコミックにしか見えない文学作品や、書籍の常識をくつがえす仕事も増えているように思う。選出したのは、森本一平「吾輩は猫である」で、文庫本カテゴリーの受賞作品である。本を手取る人に新鮮に響くと思ったからである。なんと言っても110年も昔の作品であるが、いまの時代のセンスで、テーマである「吾輩」を見事なグラフィックに展開している。

単行本では、やはり作品のシズルを表現する必要に迫られるのであるが、文庫本の場合、ある一定の情報さえきちんと抑えれば、その表現の自由度が高い。シンプルな三角形と四角の組み合わせ、こちらを見る二つの大きな赤い目。実際にカバーとして巻いてしまうと多少の謎解きの感じもあり、手にとってカバーを開いてみた時の購入者の笑顔を想像できる秀作であった。



「吾輩は猫である」 森本一平（多摩美術大学）



太田徹也

Tetsuya Ota

My Best One!

日本ブックデザイン賞2015
学生部門／ブックジャケット(四六判)

『吾輩は猫である』

高橋亮次 (京都嵯峨芸術大学)

吾輩、どこで生まれ育ったかもわからない主人公の雄猫である。ここでは吾輩の視点から見た人間関係や争いごとを、風刺的、戯作的に描いています。

この装幀画では、猫をモチーフにしたイラストレーションや写真を使った見せ方ではなく、猫が引っ掻いた爪あとを原寸大のテクスチャーで繰り返しリピートするという方法で見せている。カバーのその引っ掻きあとは、人間の五感をあらゆる角度からくすぐる効果がある。さらにそこから引っ掻き音や鳴き声までもが聞こえ、猫のあるゆる所作を感じとることができた。

この本が書店の平台に並べられた様子を考えると、そこでは猫好きの人はもちろんだが、猫嫌いの人も思わず手に取ってみたいくなるような、そんな臨場感に富む場面が思い浮かぶ。

デザインとしての本の「題名」は、太ゴシック体で矩形のカタチに朱色のベタ地色ヌキで、オーソドックスにまとめられている。また、猫にとって刺激性のある段ボールという素材を、“そのまま”使いたいとするデザイナーの意図がうかがわれる。猫の爪あとと段ボールが一体化され、装飾として強い説得力とインパクトを持った仕上げとなっているのである。

私はこの一冊を『吾輩は本である』と言いたい。受賞オメデトウ。



『吾輩は猫である』 高橋亮次（京都嵯峨芸術大学）



澤田泰廣

Yasuhiro Sawada

My Best One!

日本ブックデザイン賞2015
一般部門／ブックジャケット(四六判)

『不思議の国のアリス』

上清涼太

“目を奪われること”を大切な基準として審査に臨んだ。

オリジナル作品の競演である。そこには出版デザインの現状に対する新鮮な提案が欲しい。もちろん表現の質がそれらをしっかりと支えていることが絶対条件だが、両者を満たす魅力溢れる仕事に出会うことは難しかった。

そんな中、この「不思議の国のアリス」の存在感は際立っていた。重要なキャラクターであるウサギを象徴するべく、題名、作者名、そして文中より抜粋した台詞をエレメントに据え、触感を刺激するアルファベットで強烈なエンターテイメントに仕立て上げている。更に、黒と赤金による絞り込んだ配色や大胆な裁断の妙、細部に仕掛けられた洒落な二つの瞳に至るまで、多彩な実験を随所に施しながらも、物語に対する自身の解釈を明快に定着させた姿勢を大いに評価したい。意志ある計画と感性の融合がなされた意欲的なジャケットデザインだ。デザイナーの力量がひしひしと伝わってくる作品である。





豊口 協

Kyo Toyoguchi

My Best One!

日本ブックデザイン賞2015
学生部門／ブックデザイン（私家版）

『電車の通勤・通学時間新活用法』

千葉拓貴（東京工科大学）

Design for people というタイトルの本があった。米国の工業デザイナー、ヘンリー・ドレファスのデザイン人生を書いたものだが、彼の一生は、人と物、人と環境、人とシステムとの闘いの連続だったようだ。やがて彼は、商業主義のうずの中に巻き込まれ、その命を断ってしまう。

デザインの本質に、Design for all beings すべての生命のためにという、使命の軸が貫かれている。

基本は、人と人との豊かで柔しい関係を築きあげることにある。

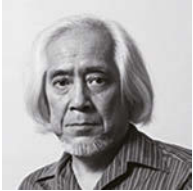
この一冊の本。作者の心、デザイナーとして将来、生きようとしている展望がそこにある。美しく楽しく整理されたストーリーが、みる人の心をうつ。公的な交通機関の中には、社会のすべてが凝縮され、問題が存在する。そこに視点を置いた作者の心に、ほのぼのとした同感と感銘を受ける。そして、将来への期待を感じさせてくれて嬉しい。

東京



電車の通勤・通学時間 新活用法

電車の中での過ごし方



中垣信夫

Nobuo Nakagaki

My Best One!

日本ブックデザイン賞2015
一般部門／ブックデザイン（私家版）

『宮内・撰田屋百景』

大町駿介

本が愛される理由は、その手触りにある。大町君が描いた古い建物のドローイングが旨くて美しい。バックに塗られたベージュ色が白壁を生かし、更に長岡・宮内の伝統的木造建築が黒々とした重量感を表現している。これは写真では表現できない。手で描かれた意図が伝わってくる。手で描く行為が建物への愛情なのではないだろうか。醸造の街の酒・味噌・醤油の匂ひをも感ずることができるのだ。だからこれは本の形にするしか意味が無い。ガラス板に写される画像は、その温もりを伝えられるだろうか。ここに描かれたような建物がヨーロッパの片田舎の街中にはある。かつては日本にもあった筈である。美しい街並の景観を守るコンセプトもイメージも私たちには欠如している。古い物を大切にす、その歴史が人の心に物語をつくる。鉄とガラスとコンクリートに固められたハイテクな建物からは、心の安らぎは生まれにくい。逆に現代の建築物は時と共に廃墟に化すと私は思っている。長い時を少しずつ修理しながら使い続けるその年輪が、老人の皺の美しさに例えられないだろうか。長岡、宮内・撰田屋の人々が、その心を共有して欲しいと私は願っている。この一冊は、その誠実な心を物語っている。

宮内・摂田屋百景 100 views of Miyauchi Settaya
大町 駿介

